

水野教育長記者会見概要

日時：令和6年4月1日（月）14時～14時30分

場所：大阪府庁別館6階 委員会議室

【水野教育長より】

教育長新任のあいさつ

皆さん、こんにちは。本日付で教育長を拝命しました水野達朗と申します。よろしく願いいたします。教育長就任にあたりまして、自己紹介もかねながら、大阪の教育に対する想いを皆様にも述べさせていただきたいと思っております。

まず、今年度は、第2次大阪府教育振興基本計画の2年目を迎える年となります。大阪の教育が育む人物像は、「人生を自ら切り拓いていく人」、「認め合い、尊重し協働していく人」、「世界や地域とつながり社会に貢献する人」です。

そのような人物像を育むために、第2次計画においては、「確かな学力の定着と深化」、「豊かな心と健やかな体の育成」、「将来をみすえた自主性・自律性の育成」の3つを掲げています。そのような流れの中において、私は教育長として4つの視点を大切にしたいと思っております。

まず1つめの視点は、経営者の視点です。

これまで複数の会社の創業に携わって、経営をしてまいりました。民間経営の世界においては、「現状維持は衰退の始まりであり、常に変化する情勢の中で、いかに適切な判断、迅速な決断をしていくか」というものが問われます。

まさにコロナ禍以降の教育行政においては、多様な学びの場の創出であるとか、ICT教育の推進をはじめ、ハード、ソフト両面にわたって、考え方をアップデートしていく、いわゆる教育のあり方を再検討せざるを得ない、大きなパラダイムシフトが起きているのではないかと私自身考えております。

現状に合わせて、考え方をアップデートしていき、政策に反映させていくことが求められているのではないかと考えております。資源の最適活用と効率化にも経営者マインドを持って取り組みます。また、スピード感は顧客に対する誠意であると、そのような考えを持っておりますので、まずは教育長としてビジョンを示し、進むべき方向性を明確にしていくリーダーシップと、計画と組織編成等のマネジメントのバランスを持って、民間経営者としての経験を大阪府の教育行政にも活かしていきたいと考えております。

次に、2つめの視点は、支援者の視点です。

私はこれまで不登校支援や家庭教育支援のカウンセラーやアドバイザーをしておりまして、多くの不登校で悩む子どもたちであるとか、子育てに悩む保護者の皆さんに接してきておりました。支援においては、専門的なアセスメントと、個別ニーズに合わせた包括的なサ

ポート体制の構築が求められます。大阪府が掲げる「将来をみすえた自主性・自立性の育成」というものは、支援領域においても重要な目的意識であります。

教育行政の事務局の立場では、日常的にひとりひとりの方々と対面して悩みに寄り添っていくということは難しいかもしれませんが、その政策であるとか、書類の向こう側には必ず人がいるんだと、そこには場合によっては困り感を持っている方々もいるんだということを忘れずに支援者として培った専門的知見であるとか、困り感のある子どもたちに伴走してきたマインドや経験を教育長の職務にも活かしていきたいというふうに考えております。

3つめは、公職者の視点です。

「学校でも行政でも働いたことがない民間経営者の40歳の教育長」として、大東市教育委員会の教育長の職を4年間預かっておりました。当時はコロナ禍の幕開けでもございました。学校休業の真っただ中の大混乱の中での就任ということもありまして、優秀で前向きな大東市教育委員会の事務局職員の皆さんであるとか、学校経営者である校長先生方とコミュニケーションを密にとって進めてまいりました。

公務員の世界観の中において、民間経営のマインドを一方的に押し付けてしまうと、当然ながらうまくいきません。予算編成のプロセスも、その原資も民間とは違いますし、組織が積み重ねてきた歴史や文化も慮りながらも、時代が求める教育改革を進めていければと考えております。府の教育長としまして、引き続き公職者としての責任を自覚し、透明性と公平性を保ちながら、府民の皆さんの信頼と共感を築いてまいりたい、そのように思っております。

最後に4つめは、保護者の視点です。

私には小学生と中学生になる娘がおります。この子たちが生きていく未来というのはどんな未来になっていくんだろうと考えた時に、保護者としては、どんな未来であっても自立して、前向きに幸せに生きてほしいというふうに願っております。それが果たされると期待できる教育環境の整備、教育政策の立案を当事者意識を持って進めてまいりたいと考えております。多様な価値観がある世の中は大変素晴らしいものではあるんですけども、反面、そのすべての人が賛同できるものは難しいかもしれません。しかし、時流を読み、発信をしながら、納得解を同じ保護者世代として模索していきたいなというふうに思っております。そのような我が子のより良い成長を願う保護者としての視点も大切にしていきたいと思っております。

このような4つの視点を大切に、これまでの経験を活かして、大阪府の教育行政に尽力していきたいと考えております。

その上で、私たち、令和の教育に携わる者のミッションとして考えていけないのは、今この瞬間だけではなくて、未来社会を生きる子どもたちにとって価値の高いスキルを身につけるための経験を教育の場で創出していくことです。

しかし、このミッションの難しいところは、そもそも私たちの世代が経験していないこと

を、今の子どもたちに教えていかなければならないということです。

少子高齢化、ChatGPTに代表される生成系AIの発展、多様な働き方等、世の中の変化のスピードが加速度的に上がっております。そのような不確実性の高いVUCAと呼ばれる時代ではございますが、令和の教育行政に携わる者のミッションとして、想像力を駆使し、子どもたちが生きる未来社会はどのような社会かを見立て、デザインし、その未来社会を生きるための資質向上をめざす教育政策をバックキャストしていくかなければなりません。

今の子どもたちが将来ウェルビーイングの高い前向きな人生を歩むためには、「多様な学びの機会を創出し、将来的な自立の基礎を培うこと」、これをベースに「子どもをまんなか」にしたワクワクする教育政策を立案していくことが、大阪の次世代への投資となり、教育行政を預かる立場の責務であると思っております。

「海岸線を離れる勇気を持たなければ、新大陸は発見できない。」

このような言葉を、前職の4年間、職員であるとか、学校の先生方によく伝えておりました。コロナ禍を乗り越えた今、まさに教育の新大陸に上陸するためには、我々大人側が勇気を持って改革を進めていくことが大切です。

課題もある中ではございますが、ひとつひとつの課題と正対し、先ほど述べた4つの視点を大切にしながら、大阪府教育庁職員の力を最大限発揮できるようマネジメントをしていくことで、「ポジティブに、アクティブに、クリエイティブ学び続ける明日の人財の育成」をめざしたいと考えております。

結びになりますが、今年度は万博開催の夜明け前。夜明け前が一番暗いなんていう言葉もございますが、そのぶん朝日の眩しさは人生を変えうる光になるかもしれません。

世界に大阪を発信するいい機会、子どもたちの好奇心を刺激し、ワクワクを創出するまたとない機会と私自身は捉えております。

そのようなタイミングをチャンスと捉えて、大阪の教育をさらなるステージに押し上げていくためにも、市町村教育委員会や学校現場、私学などの関係者と連携をしていきながら、一丸となって全力で取り組んでまいりたいと思っておりますので、記者の皆様方におかれましても、どうぞご協力をいただくようよろしくお願いいたします。

【質疑応答】

(読売新聞)

就任に当たり、今教えていただきましたが、具体的に達成したい目標を教えてください。

(水野教育長)

冒頭で述べましたように第2次教育振興計画の2年目というところでもありますので、そこに掲げられているものを計画通り進めるというのは、必要であろうかと思っております。その上で、4つの視点という個人的に大切にしているところを語らせていただきましたの

で、その領域で言いますと、昨年度内の総合教育会議で、多様な学びの機会を作っていくんだというところを、高校でも学びの多様化の議論が進んでおりますので、やはりそこに関しては、不登校支援に携わってきた立場として進めていきたいと思っております。

また、やはり府立高校ですね。皆さんにも取り上げていただいたとおり、府立高校のあり方のところに関しましても、試験日程であるとか、内容であるとか、そういうところは市町村教育長の立場でたくさん見てきたところがございますので、そこはしっかり進めていきたいなというふうにも思っております。

言いだすときりがないですけども、今、やっぱり思い浮かぶところというのは、不登校支援と府立高校のところかなというふうに思っております。

(読売新聞)

あわせてもう1点、来年度から段階的に始まる無償化について、現時点でのお考えを教えてください。

(水野教育長)

生まれた家の経済状況によって子どもたちの進路が左右される世の中と、左右されない世の中と、どちらがいいですかと単純に考えたときに、私としては当然後者の方が理想的だというふうに考えております。

もちろん大きな変化、大きな制度変更でございますので、議論は尽くしていく、様々な調整が必要ではあるんですけども、まずは政治が理想の社会を目指して踏み出したことは素晴らしいことだなと感じております。その方向性のもとで、やはり教育長は行政の長でございますので、その理想の方向性の中でどのように調整をしていくか、掲げた理想が違う形にならないように、調整しすぎて本来の本質とずれていくようなことになってはいけななというふうにも思っております。ですので、この方向性のもとでしっかり調整していく、そんな努力をしていきたいと思っております。

(産経新聞)

学びの多様化校、今年度は進めていかれると思うんですけど、全国的にそういった学校が増えているということで、不登校に携わる現場の皆さんからは、様々なニーズがある子を一箇所に集めるということが返って良くないのではないかというご意見も出ていると思いますが、その点について専門家としてどのようにお考えでしょうか。

(水野教育長)

例えば多数の人たちが集まるスペースにいることが難しい子にとっては、今、産経新聞さんがおっしゃるところの懸念が必ず出てきます。集めることに対してのデメリットですね。しかし、不登校というのは、不登校という言葉だけで語るとずいぶん議論が難しくなってきました、例えば繊細で、いろんな声が気になるタイプの子たちにとっては、まさにこの部屋のような雰囲気や環境だとプレッシャーを感じてしまうことでしょうか。これで「うう」とな

ってしまうタイプの子は、オンラインであるとか、週1回のスクーリングであるとか、場合によっては少人数指導、そういうものが必要になってくると思います。しかし、そうではなくて、例えば中学校のときに人間関係で少し傷ついてしまった子に対しては、もしかしたら集団の中で、多様な子どもたちとコミュニケーションをとっていく方が、いわゆるケアや、成長に繋がっていくこともございます。

はたまた、発達に特性のある子たちが苦勞してしまうような不登校の事例もございます。そうなってくるとやはり専門的なアセスメントというものが求められると思います。なので、あくまでこの学びの多様化学校は、全ての不登校の子たちを完全にケアするものではないと私は思っています。

多くの不登校の中の、アセスメントをした一部領域の子たちや、今までケアできていなかった領域の子たちが来られるようになるということを前向きに捉えています。しかし、家すら出られない、部屋すら出られない不登校の子も中にはいるんですね。そういう子に対しては、アウトリーチの機能であるとか、はたまたメタバース空間を利用した学びの場のアクセスであるとか、多様な手法が必要であり、一つの対応で全てを解決することは難しくなってきましたので、まずは、私はこれまで小中学生の不登校をカウンセラーとして、市の教育長として見てまいりましたが、高校生の不登校の子たちのいわゆるアセスメントをしっかりと行って、もれなくそこがまさに誰1人取り残すことなく、学びにアクセスできるようなところを理想を描きながら、その一つとして、その核として、学びの多様化学校、ステップスクール、エンパワメントスクールというものを、大阪府として前向きに進めていきたいなというふうには考えております。

(毎日新聞)

先程のお話の中で、試験日程のあり方の改革をしっかりと進めていきたいとお話がありましたが、試験日程とか試験のあり方について、現状どういってお考えをお持ちでしょうか。

(水野教育長)

皆さんご案内のとおり私も今、辞令をいただいて4時間、5時間ぐらいですので、まだ各課からのレクを受けていない状態ではあります。ですので、まずしっかりと、試験日程のところというのは、大卒で言いますと、過去の令和5年の議論の流れの中で、一定前倒しをしていったり、教科を絞っていったりっていう議論が当然ございましたので、その流れに大きく竿をさす考えを持っているわけではない。現状で言えるのはこれです。あとは各課のレクをしっかりと受けまして、現状分析をした上で、どうしていけば大阪府の子たちが多様な学びにアクセスできていくのか、ステークホルダーの皆さんもいらっしゃる領域ですので、その調整がどういふふうになっていくのかを、ここは冷静に分析をしていきながら進めていきたいなと思っています。

(時事通信)

高校授業料無償化の関連で、政治が目指す方向に向けて進んでいくということを教育長はおっしゃったと思いますけれども、政治の方向としては近隣県についても同様に実施したいという考えでありながら、新年度始まった段階ではなかなかそれが達成されていない状況。教育長として、この点についてどういうふうに進めていくのか、お考えを聞かせてください。

(水野教育長)

まずは無償化の参加に関しては、現状を無理やり入ってくれという、そういう論調ではなく、お声がけをしていって、各私立学校さんが選べる状況にはなっていますので、そこに関しては決定権というのは、私立さんが持つべきかな、というふうには考えています。しかし、理想の世の中の話はさっきしましたけれども、もしそこが、その共感といいますかね、大阪でスタートしたこの共感の輪が広がっていったって様々な制度というところを合理的に進めていけるのであれば、この流れってというのは、東京でもちょっと形は違いますがスタートすることですので、私としては広がってほしいなというふうには思っております。

ただ、ここは事務方としても調整事が当然出てくると思っておりますので、じっくりとそこは見きわめていきながら進めていきたいなと思っております。

(関西テレビ)

府立高校のあり方の関連で、今般の入試で府立高校について志願者が減少したりとか、あとは定員割れの高校も増えております。先般退任された教育長の会見では、今後、公立と私立の切磋琢磨が必要だというふうなお話もございました。教育長としては、今後大阪府立高校と私立高校の切磋琢磨といいますか、共存っていうところにはどのようなお考えでしょうか。

(水野教育長)

前橋本教育長がおっしゃっていたところに賛同する立場ではあります。やはり子どもの数がそもそも減ってきている中で、いわゆる志願割れのところが定数を仮に変えずにいけば、当然増えていきます。さらに、そこに私立の無償化の影響というものもあろうかと考えています。ここもこれから私自身も分析、レクを聞いていくことにはなるとは思うんですが、一定私立の専願の方に数が流れていくと、府立高校自体の志願者が減っていく。志願者が減り、定員が割れると、今の大阪府の条例上は3年で場合によっては統廃合のテーブルのつてくると、こういう一つのルールを考えていけば、府立高校のあり方が今までのままでは苦しいと思います。おそらく皆さんもそう違う意見を持たないんじゃないかなと思います。

ただ、苦しいから仕方ないよねではなくて、府立高校には府立高校の良さというものがございまして、実際に定員を満たして、こういう状況でも子どもたちが行きたいっていう高校はあるわけですね。そういうところを考えていくと、私立さんは私立さんで魅力的な高校の教育、運営をしていき、公立も公立で子供たちがしっかり選びたいと思えるような運

営をしていく、ここをおそらく前教育長は「切磋琢磨」と表現したのではないかなというふうに思います。

私も、まさにこれからそこを見ていく立場ではあるんですけども、ただ切磋琢磨をする、経営的な視点ではあるんですけども、売り上げを上げていこうと思ったら当然経費をかけないとなかなか売り上げというのは上がりにくい。経費をかけずに成果を出すというのは、不可能ではないですけども、爆発的な効果というのはよほどの工夫をしない限り生みにくい、そこも当たり前の話かなと思います。

府立高校において、切磋琢磨を校長先生方ができるようにどういうサポート、場合によってはハード整備かもしれませんが、場合によっては柔軟なカリキュラムの編成であったり、カリキュラム編成権が元々校長先生にあります、そこに対する後押し、はたまたもう一つ言ったら、やっぱり高校のブランディングでしょうかね。やっぱり私立さんなんかは動画とか、いろいろホームページなんか見ても、キラキラしているように映ってくる。じゃあ果たして公立はそのブランディング戦略っていうのをやってきたのかっていうと、やはり弱い。そういうふうになってきますと、府立高校に対して弱いから駄目なんだではなく、ブランディングをしていこうよ、いいことをしているんだから、いっぱい人も集まってきているところもあるんだから、やっていこうよっていうこういう切磋琢磨のいわゆる機運醸成、これは引き続き私も考えていきたいなというふうに思っています。

(関西テレビ)

ちょっとまだ言いにくい部分もあると思うんですけども、先ほどその経費をかけずに成果を出すのは難しいというお話ありましたけれども、そうすると選択肢として例えば今後ですね、府立高校に関わる予算を今以上に措置すると、そういうことも選択肢としてはあるということでしょうか。

(水野教育長)

やはり財政のところを今この立場、まさに初日で語るのはいぶふん難解だというのはもちろんご理解いただきまして、気持ちとしては、気持ちとしてはですけども、やはり教育予算比率というものをしっかり上げていって、府立高校が切磋琢磨、やれるよねっていうような材料は集めたいなという、気持ちの部分ではそう思っております。

(朝日新聞)

今お話の中で、府立高校には府立高校の良さがあるっていうお話がありまして、今回入試で定員が割れていない学校を見ていたら、偏差値が高い学校なのかなっていうところもあるのですが、教育長として考える府立高校ならではの良さはどこでしょうか。

(水野教育長)

府立高校とひとくくりにしても、一校一校で特色が実はあるんですね。ぜひ記者の皆さんも一度いろいろ授業を見ていかれたらなと思うのですが、結構面倒見がいい学校っていう

のこともありますし、私立よりも、例えばですがICTのところを前向きに取り入れた授業をしているなというところもございます。

公立か私立かっていうのも、なかなかステレオタイプの議論ではちょっと難しいところがあるんですけども、公立の中でも各特色は既にあると私は思っているんですね。公立の中の特色の中の一つとしては、やはり学力面の方で違いがありますよね。そのデータを見ていく限りは、いわゆる偏差値的に高いところは割れていない、それはもう事実としてはそうだと思います。逆に学力的に中堅以下のところが、今回、そこが私立に流れていったのかなというような、これはデータ分析が必要ではありますけれども、そこは感じるところです。

その中で、中堅と言われる公立高校が、既に特色はあるんだけどもわかってもらえていないところもあると思うんですね。それがまさにプロモーション不足のところかなというふうにも思います。また、わかっていたいたとしても、私立専願をして早くにいわゆる進路を決めてしまいたいというニーズも、保護者のニーズか子どものニーズかっていうと難しいところですが、そこもあるんじゃないかなというふうにも思っております。ですので、公立高校の強みがこれだっていうのは、言えないといけないと思うんですけども、公立の強みっていうのは、意外とね、多様であることかもしれません。

(共同通信)

冒頭で万博1年前ということ、この1年間、具体的にこういう取組みで子どもたちに万博を楽しみにしてもらえたらなど、お考えがありましたら教えてください。

(水野教育長)

万博の議論っていうのは、それこそ新聞紙面なんかで見ている、私は保護者として子どもにどう万博を語っていいんだろうかって、難しいところがあるんですね。つまり、ポジティブな情報が少ない点です。単純に、こんな技術見たことがないとか、それこそ先日、ドラゴンボールの鳥山明先生が亡くなられて、私個人的には衝撃を受けたんですけど、例えば漫画の世界の何かの技が万博で再現されるなんていう、仮にですよ、あったとしたら単純にワクワクすると思うんですね。そういう要素が、まだ我々府民であったり、子どもに対してマスメディアを通じてなかなか出ていないっていうのが、ちょっと懸念かなというふうに思っています。教育現場においてもそういう万博のワクワクする情報、こういうパビリオンがあって、こういう見たこともない技術が体験できるんだよ、見られるんだよっていうところが、まず示していかないと、ワクワクは作っていけないかなというふうには思っています。

具体的に、府の教育長の立場で何かということと言いますと、まずはやはりお越しいただきたいなというふうに思いますので、ここはつい昨日まで市の教育長の立場でございましたので、子どもたちを連れてきてほしいという府の想いはものすごくわかりながら、子どもたちを連れていく実務の難解さもわかっているつもりです。ここをしっかりと調整していきたいなというふうに思っております。

(産経新聞)

学校の先生方から、子どもたちを連れていくとなると、初めていく場所ですし、遠方から来る場合もあるので、下見をしたいが、万博が開いてからじゃないと見に行けないといことで、4月の開業からだとならば本当だったら2回3回下見する学校もあると思うのですが、まったく下見する暇がないということで、例えば万博がオープンする前に下見ができればという声もあるのですが、そのあたり何か働きかけていく予定とかありますでしょうか。

(水野教育長)

今おっしゃった懸念というのは、学校や市教委が持って当然の懸念だと思います。そこをまさに調整して行って、こういうやり方だったら何とか安心安全に前向きに連れていけるなと思っていただく努力を、我々はしていかないといけないかなというふうには考えています。